

うつしから読み取る技術的アーカイブ

平成29年度 活動報告

本研究では、本学が継承してきた「うつし」のあり様について改めて考察を加えると共に、その貴重な記憶をアーカイブすることにより生まれる可能性を模索します。「うつし」は、絵画の模写や作品の複製や模倣行為など、多くの意味を含んだ言葉ですが、本研究ではオリジナルに対するコピーという対立的な関係から一旦離れ、「うつし」それ自体についての解釈を深めることを目指します。

これまでの活動の中で、本学で模写の指導にあたった入江波光に関する資料や、本学芸術資料館が所有する模写や絵手本といった「うつし」のアーカイブを行ってきました。今後は「写すこと」と「写されたもの」という二つの視点から考察を加えていきます。

人の手で「写すこと」は、作品の背景を読み解き、必要な技術を習得することと深く関係しています。ものの見方や技術を後世へと引き継ぐという意味で、非常に大事な役割があるといえるでしょう。また、模写作品や絵手本などの人の手で「写されたもの」だけでなく、機械による複製品も対象に加えて、具体的な「うつし」の記憶としてアーカイブしていきます。

そして来年度からは、「うつし」の具体例として京都御所小御所に収蔵されている襖絵と、その模写を取り上げます。この模写は、当時京都で歴史人物画を得意としていた菊池契月の一門が制作したもので、本学にとって所縁の深い「うつし」の記憶といえます。

これらを総合してより多角的に、芸術大学における「うつし」の活用方法を考えていきます。

小林 玉雨（京都市立芸術大学博士課程）